目白大学　総合科学研究
13号　2017年３月　53－68

論文

高齢者と動物との絆について：高齢者の居住空間における動物共生社会の構築に向けて

―高齢者施設の動物介在活動に対する介護職員の意識変容プロセス―

About the bonds of elderly people and animals; For construction of the symbiosis society with the animal in elderly people's habitation space

―Consciousness transformation process of the care staff for the animal-mediated activity of elderly people's facilities―

越智　裕子
（Yûko OCHI）

Abstract:

This research examined the alteration of consciousness in the measure process towards the welfare of moving-in elderly people and a companion animal in special elderly nursing home for the care personnel who offer the moving-in floor permanent residence type animal assisted activity. The investigation candidate carried out the half-structure individual interview for two weeks to 13 men and women actually specializing in a floor from the beginning of July, 2016 (Heisei 28), and conducted data analysis to them using M-GTA.

As a result, the process of the care personnel's alteration of consciousness was divided into 2 terms. The first term is an "animal assisted activity participating introductory period", and consists of five categories, 12 subcategories, and 31 concepts. In the precondition which affects continuation of an animal assisted activity, there were the care personnel's individual "1.various experiences about a companion animal and concern", "2.the various care views about an elderly-people care and experience" which were backed by experience, the existence of "3. the concern by the knowledge and experience to an animal assisted activity or animal assisted therapy", and "5. fluctuation of a feeling to a daily care" to becoming the charge. In the necessary condition, there was "4. intention to the opportunity of place-of-work selection and participation of an animal assisted activity" of the care personnel and the management subject. The second term is "continuation terms for an animal assisted activity", and consists of three categories, eight subcategories, and 21 concepts.The care personnel experience "7. the consciousness-ized process of bonds with an institution animal", and consequently "8. self-growth" is possible for them as a person and a professional for that purpose "6. difficulty gets over" became an indispensable condition and there was the recurrence relation of "7" and "8." For the care personnel's active animal assisted activity, viewpoint which catch in a process was required.

キーワード：フロア常駐型動物介在活動、プログラムの運用、ケア観、M-GTA,
Keywords：A floor permanent residence type animal assisted activity, employment of a program, a care view, M-GTA

おちゆうこ：目白大学人間学部人間福祉学科非常勤講師

1．研究の背景

近年我が国のペット人口の増加の背景には，①単身生活や夫婦のみ世帯の増加，②未婚・離婚率の上昇，③家族形態の変化，④人間関係の希薄化など，人とのかかわりの減少があり，生活の中で生じた空虚感の埋め合わせに疑似家族や友人としてペットを用いる傾向が伺える。本来家族メンバーや友人などから充足されるはずである情緒的機能や養育的機能，社会潤滑機能を，ペットを飼うことで得ようとしているのである。この人と動物の相互関係から発する精神的な結び付きを「ヒューマン・アニマルボンド《ヒトと動物のきずな》（以下HAB）」と呼び，ペットのうち「飼い主との関わりにおいて社会的・心理的に特別な役割を果たしている動物」を「コンパニオン・アニマル《伴侶動物》（以下CA）」と呼ぶ[1)]。

HABの研究は，1970年代以降，米国を中心に高齢者人口の増加かに伴い，動物が人々の心身の健康に及ぼす影響や，患者に対する治療的効果に着目した研究からはじまり，心理学，精神医学，社会学，獣医学，比較行動学など学際領域で研究が展開されるようになった。特に，1977年に設立された米国の「DELTA SOCIETY」は，人と動物との相互作用に関する教育，研究，サービス活動を目的に設立され，1980年代以降には，疾病治療に加えて，健常者のwell-beingに及ぼす動物の飼育の影響も含め，国際的な研究発展に寄与した[2)]。その後，各国で研究検討され，わが国でも，1980年代後半より，HABに関する研究や活動の取り組みがみられ，学際的に発展してきた領域である。このようにHABの研究の領域は多種多様であり，本稿では，このうち，特に高齢者研究に特化し検討していきたい。

2．高齢者と動物に関する先行研究の未解明点

高齢者を対象にしたHABの研究は大別すると，①CAが高齢者にもたらす効果について，②高齢者を対象にした動物介在活動／動物介在療法について，③高齢者のCAの飼育について，④老年期におけるペットロスの４つに分類される[3)]。

特に①は，HABの研究初期から検討された課題であり，生理機能や心身機能や社会関係機能が低下しがちな高齢者に対する効果は国内外を問わず多くの研究者によって研究されている。国内外の研究動向では，「心理的効果」「身体的・生理的効果」「社会的効果」の効果が挙げられている[4) 5)]。しかし，いずれの研究においても，サンプル数の少なさがあり，調査結果の安定性に課題を持ち，かつ特に日本の場合，実証研究の少なさが指摘される。

次に，②は，俗名としてわが国ではアニマルセラピーとされているが，正式には動物介在活動（AAA），動物介在療法（AAT），動物介在教育（AAE）と目的や対象者，内容により区分されている。AAEは主に，児童や生徒，学生の教育一環である。一方，AAAは，動物との触れ合いを目的にした活動で，医師の直接的関与は伴わず，治療戦略や医療従事者の治療計画は原則ない。AATは，人の治療目的のために設定し，基本的に医師主導で実施，多職種の医療専門職が治療目標や治療計画を作成し，実施している[6)]。さらに，AAA＼AATは，1986年から獣医を中心に設立されている社団法人日本動物病院福祉協会の実施するCompanion Animal Partnership Program（以下CAPP）活動などの訪問型と，施設内での常駐型の２つがある。この常駐型には，施設の玄関や事務所付近での常駐と，入所者フロアでの常駐居住がある。

AAA＼AATの研究は，主には，上記の①と同様の効果研究と[7)]，導入プログラムについての研究があり，近年，高齢者施設や病院での取り組み例が増えているが，いずれも事例報告が多く研究蓄積が十分ではない。AAAの場合，取り組み事例の紹介が多く，効果測定が十分行われておらず，実施には十分に訓練を積んだ専門職と，選定された動物が必要であるが，これらの養成過程にも問題がある。

③は，高齢者は他の世代と比較するとCAの所有率は低い。そのため，高齢者の飼育力や経済面の低下，寿命面，住環境といった飼育の諸問題に関連する要因，CAに対する態度の測定が多く検討されている。しかし，高齢者が継続

的に動物を飼うには，特に周囲のサポートが必要であり，サポートの授受が得られない場合諦めざるを得ない現状があるが，この動物，高齢者とサポーターに対する研究がほぼ見当たらない。

④単身の高齢者，子育てを終えた女性は，ペットへの愛着や依存度が高く，擬人化する傾向があることから離別，死別には「ペット・ロス症候群」の問題が浮上する。ペット・ロスは，離別，死別であるBereavementとそれにともなう悲嘆反応であるGriefを含め定義され，「ペット・ロス症候群」は，悲嘆反応の遷延化した場合に認められる心身両面の障害として解釈される[8)]。この過度の悲嘆は，高齢者の場合，心身機能の低下だけでなく，時に寿命面にまで影響を及ぼすことがある。そのため，この乗り越え過程と，そのケアについて多く研究されている。高齢者が要介護状態に陥り，単身の居宅から集団生活の場である施設へ移行する際には，CAとの離別が顕著にみられる傾向にある。この愛着対象であるCAとの不本意な別れは，過度の自責の念や罪悪感などの悲嘆反応が生じる場合があり，心身機能の低下しつつある高齢者のその後の健康に与える影響は容易に推測できる。現状，この入所者に対する悲嘆過程とそのケアについての研究はない。

以上の結果，高齢者にもたらす効果性の高いCAに対する離別問題を解決するためには，多様な人々が生活する施設において常駐型で動物を飼い続けることも一路にある。しかし，他者の同意や飼育の担い手，問題行動・衛生上の問題への対応，維持費や居室の整備など，様々問題への対策が必要となり，施設において常駐型で動物を飼うことは，肯定的にも否定的にも周囲の人々に与える影響が大きい。人と動物とが共生していく環境を構築するためにはまず，阻害要因を把握し，それを促進要因へと改善していくことが求められる。

３．研究目的と方法

本研究では，高齢者が自身の心身機能が低下しながらも，長年連れ添ったCAとの絆を大切にした取り組み，または，高齢者の生活に動物が当たり前にいる取り組みとして，人と動物の共生社会の実現を具現化するための方法を検討することを主たる目的とする。そのため，本調査では，高齢者の入所施設である特別養護老人ホームに焦点を当てて，現に，動物常駐型の入居空間を提供している特別養護老人ホームの介護職員を対象にし，入居高齢者と伴侶動物との福祉に向けた取り組み過程における意識変容のプロセスについて検討する。

３．１　分析方法の選択の妥当性

本研究は，施設動物と介護職員，入居者の相互作用の人間行動について，介護職員の意識を通して精緻に記述することを目的とするため，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified　Grounded Theory Approach以下「M－GTA」とする）に基づく分析を行った[9)]。

３．２　調査対象者の概要

調査対象者は，動物介在活動の内，入所フロア常駐型の特別養護老人ホームに現在勤務している男女13名（表１参照）を対象にした。

３．３　調査データの収集

調査データの収集の期間は，2016（平成28）年７月上旬から２週間の半構造化個別面接によって調査を実施している。面接場所は，いずれも調査対象者が働く施設の一室を借りて実施し，調査記録は，調査対象者に承諾を得た後，

表１

	性別	年齢	介護経験	動物ユニット歴	犬猫飼育歴
1	女性	40代前	17年3か月	4年3か月	×
2	女性	40代後	15年	3年3か月	○
3	女性	40代後	14年	1年6か月	○
4	女性	20代後	4年	3年3か月	○
5	女性	30代前	11年	4年3か月	×
6	女性	20代前	5年3か月	5年3か月	○
7	男性	20代後	2年3か月	1年3か月	○
8	女性	50代前	6年	2年4か月	○
9	女性	30代前	4年3か月	1年3か月	○
10	女性	40代後	15年3か月	3年3か月	○
11	女性	20代後	6年3か月	5か月	○
12	女性	20代後	3年3か月	5か月	×
13	男性	10代後	1年4か月	1年4か月	○

ICレコーダーに録音し，メモを取った。インタビューは，一人１時間程度である。インタビュー項目は以下の４つを用意し，基本的には話の文脈を重視して実施した。①現在の施設動物と共生するフロアに勤めるようになったきっかけ，②動物との関係性の中で起きた変化（入職前後），③動物と入居者との関係性の中で起きた変化（入職前後），④上記①②③に関係する要因についてである。

３．４　倫理的配慮

本研究において，調査対象者に対して，調査依頼時には，現に動物がフロア常駐型の特別養護老人ホームに勤務する職員に対し，①データの目的外使用の禁止と，秘密は守られること，②論文での記載方法は，個人が特定されないようにすること，③研究及び調査に対する疑問・要望を研究者に対して行うことができること，④調査を否定する権利および調査途中での中断または中止する権利を有していること等の事項について口頭並びに書面にて説明し，同意書によって了解を得た者だけを対象にしている。

３．５　分析の方法と手順

分析結果の厳密性を高めるため，以下に述べるデータ分析のすべての過程において，本論文著者と質的研究方法に熟知した２名を含め，３名が一致したものを採用した。

まず，分析がデータに根差したものとなるように，分析焦点者と分析テーマを決定した。分析テーマは「施設動物と入居者との日常を通して，動物との関わりの中で変化する介護職員の意識」とし，分析焦点者は「施設動物と入居者が居住する高齢者施設のフロアを担当する介護職員」とした。

データ分析を行う際に，分析焦点者と分析テーマを意識しながら，データを文書化したものを読み込み，分析テーマに関連する箇所をピックアップし，分析ワークシートを作成していった。作成にあたり，定義とヴァリエーション（具体例）を参考に概念を生成した。ヴァリエーションへの採用にあたっては，概念の定義に該当する箇所の前後関係から意味を検討して，該当する概念名に合致するかどうかを検討した。ヴァリエーションを探す際には，類似性だけに着目するのではなく，対極に位置するヴァリエーションの存在を念頭に置き，比較の観点から分析ワークシートを作成した。対極例や解釈の際に参考となるようなアイデアや疑問点などは忘れないように理論的メモに記入し，時折，理論的メモを振り返り，概念名の修正などを行った。分析の厳密性を確保するために，分析ワークシートの作成段階で７回にわたり概念の生成を見直して検討を重ね，質の保証に努めた。分析ワークシート完成後は，理論的メモを参考に概念間の関係性を考えた。その際には，意味のまとまりとして関係性をとらえるのではなく，生成した概念と他のもう一つの概念との関係性を個々の概念ごとに検討した。その上で概念間の関係について言葉を使ってカテゴリーとして集約し，カテゴリー間の関係を結果図としてまとめ，結果図を説明するためのストーリーラインを作成した。

４．研究結果

４．１　概念の生成とカテゴリー

表２は，ヴァリエーション（具体例）から生成した定義と，それらを参考に生成した概念となる。分析の結果，最終的に採用した概念は52，カテゴリーは８であった。《》はサブカテゴリー，【】はカテゴリーを表し，サブカテゴリーはいくつかの概念から，カテゴリーは，いくつかの概念とサブカテゴリーから構成され生成した。該当データ数は，ヴァリエーション（具体例）を挙げた調査対象者（表１参照）を示している。

４．２　ストーリーラインと結果図

M-GTAでは，結果は概念図で示される。本論では，まず分析によって得られた結果の全体のストーリーラインと結果図（図１）を時系列に沿って「動物介在活動参加導入期」「動物介在活動継続期」の２つの段階に分け提示する。その上で，仮説の生成となる考察を論じていく。

【２．高齢者ケアに関する多様なケア観と体

表２　概念の生成とカテゴリー

サブカテゴリー	概念	定義	データ番号
【１．伴侶動物に関する多様な体験と関心】			
≪伴侶動物の飼育体験と関心≫	伴侶動物の飼育経験なし、苦手、普通	動物に関する飼育経験がなく、もしくは一部の動物に関しての飼育経験がなく、動物全般、または一部の動物が苦手か、普通である。	1,4,5,8,12
	伴侶動物の飼育経験あり、継続的、好き	動物が好きで子どものころから飼っていた、もしくは大人になってから飼っており、一時中断は見せても現在も継続的に動物を飼っている。	2,3,6,7,8,9,10,11,13
	子どもの時から飼育経験あり、現在不在、好き。	動物は好きで子どもの頃から飼育していた、もしくは大人になっていから飼っており、死別、離別をきっかけに現在は飼っていない。	5
≪伴侶動物への責任と役割意識≫	他者中心の分担役割	他の家族メンバーが主で飼っているが、自分も役割分担しながら責任をもってペットの世話をしている。	3,6,7,9,11,13
	自己中心の分担役割	自分が世話役割の主たる責任を担い、他の家族メンバーとともに役割分担しながら世話をしている。または、主たる責任を担わなくてはならないことを案じ飼っていない。または、ペットを飼った経験はなく、死ぬまで責任もって飼わなくてはいけないので飼わない。	1,2,4,5,8,9,11,13
≪伴侶動物からの恩恵≫	自己に対する恩恵	癒し、話し相手、番犬、運動相手などペットを飼うことで日常生活に多様な恩恵を受けているとの認識している。	2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,13
	他者や他者間に対する恩恵	癒し、受情、話し相手、番犬、運動相手などペットを飼うことで日常生活において家族がさまざまな恩恵を受けていることを認識することや、他の家族メンバーとの間での潤滑油機能を持つことを認識している	2,3,10,11
	伴侶動物の擬人化	子どもの時から、もしくは長期間伴侶動物を飼い、世話役割やさまざまな恩恵を受けている内に、親や子、きょうだいと同じような存在として認識している。	4,7,8,9,10,11,13
≪ペットロスと乗り越え体験≫	ペットロス経験	かつて、自身の飼っていた伴侶動物の喪失体験を１度ないし、２，３度経験したことがある。	2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,13
	ペットロス乗り越え体験	伴侶動物との死別、離別による悲嘆を経験した者が、何らかの形でグリーフワークを行うことにより動物の存在に気づき、命の尊重や後悔のない人生やケア、グリーフケアの重要性に気が付いていくことで乗り越えを経験している。	2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,13
【２．高齢者ケアに関する多様なケア観と体験】			
≪高齢者へのケア観とケア探求行為≫	悔いのない、満足のいくケアの探求	終末期ケアの後悔などから入所者の生活や人生の満足を思考し、終末期や、日常生活でのケアによる、満足感や安心感、楽しみの提供を希望している。	1,2,3,4,6,8,9,10,11,12,13
	家族を含めたケア	治療方針の決定や後悔がない看取りが行えるように家族のニーズを中心にしたケアを希望し、家族支援を含めたケアを希望している。	7,8
	日常的に本人や家族の希望を探求する姿勢	満足のある最後のために、日々入居者の訴えを感じ取ることを重要視し、その望みをくみ取るために、元気な内、日ごろからの関わりや会話を大切にしている。また、後悔のないケア、満足のあるケアを家族と行うために日ごろから家族ともコミュニケーションをとることを重視し探求している。	4,6,7,12
	学ぶ姿勢の確保	入居者から学び、次に活かしていくことで、入居の生活や人生を充実させたいとのことを重視している。	5,6
≪高齢者ケアへの自信のなさ≫		初めての特別養護老人ホーム勤務や、初めての介護業務であるため業務遂行への心配がある。	2,8,12,13
≪さまざまな高齢者ケア体験≫	高齢者ケア経験の豊富さ	介護職員は、入職前にすでに居宅や施設での高齢者ケアへの勤務経験を持っている。	1,3,4,5,6,10
	高齢者ケア経験のそしさ	高齢者ケアの経験を持たぬものか、特別養護老人ホームの勤務が初めての者である。	2,7,8,9,11,12,13
【３．動物介在活動や動物介在療法への知識や体験による関心】			
≪動物介在活動への賛同≫	動物介在活動・療法の体験や知識所持の介在活動への賛同	動物介在活動・動物介在療法については間接的に経験をしているか、アニマルテラピーの教育かマスコミ、知人を媒介にして知識を持っているため入居施設で動物介在活動を実施するのに賛同をしている。	3,4,5,6,8,9,11,12
	動物介在活動・療法の未経験・無知さの介在活動への賛同	動物介在活動や動物介在療法について、これまで関心を示さずにいたが動物は好きで、飼育経験もあり、その恩恵も知っているため入居施設で動物介在活動を実施するのに賛同している。	2,6,10,13
≪動物介在活動への困難さ≫	動物介在療法の知識所持の動物介在活動への困難さ	動物介在療法の知識を持っており、活動に至るリスクも十分に理解していることから動物介在活動を実施するのには難色を示している。	4,8,12
	動物介在活動の未経験・無知さの困難さ	動物介在活動や動物介在療法について、これまで関心を示さずおり、動物好きで動物の飼育負担の経験を持っことから、動物介在活動に難色を示している。	1,8,9
≪動物介在活動への未知さ≫	動物介在療法の知識所持の、動物介在活動の未経験・無知さの未知	動物介在療法の知識はあるが、動物介在活動は未経験であるため、実施が可能か否かわからない状態である。	4
	動物介在活動の未経験・無知さの未知	動物介在活動・動物介在療法において、これまで関心を示したことがなく、実施が可能か否かわからない状態である。	1,5
【４．職場選択の機会と動物介在活動の参加への意思】			
≪職場選択の多様な動機≫	特別養護老人ホームへの勤務希望	特別養護老人ホームへの転職や就職を希望し、動物介在活動の取り組みは面接時または入職後に知った。	3,5,9
	動物介在活動施設の勤務希望	動物介在活動施設であることを応募前の段階で知っており、希望して面接を受け入職している。	1,2,4,6,7,10,11,12,13
	伴侶動物への配慮施設の勤務希望	従業員の伴侶動物に関して配慮システムを持つ施設への転職を希望し、面接を受け入職している。	8
≪動物介在活動の説明と承諾≫	動物介在活動の説明と承諾なしでの導入	入職時または、フロア配属の前に動物介在活動に対する施設の方針や対応について十分に説明することがなく、承諾なしのまま導入している。	1,12
	動物介在活動の説明と承諾の上での導入	入職時やフロア配属の前から動物介在活動に対する施設の方針や対応について十分に説明され、了承を得てから導入している。	1,2,5,7,8,9,12
【５．日々のケアに対する気持ちのゆらぎ】			
	活動参加への希望・憧れ	動物介在活動に憧れ、配属を自ら希望し、施設の同意を得てフロア担当になる。	6,8,10,11,12,13
	活動参加への躊躇・不安	高齢者ケアと動物の世話との両立についての躊躇や不安、特別養護老人ホームのシステム、ユニット型のシステムの経験がなく、もしくは動物の世話の経験がなく、両立することに躊躇・不安を呈している。	2,8,10
	活動参加への驚き	**初めてフロア滞在型の動物介在活動を体感し、衝撃を受けている。**	1
【6．困難さの乗り越え】			
≪施設動物へのケア役割の実行≫	日常的な施設動物の世話	施設動物の運動、通院、排せつ処理、餌・水やり、遊び相手など日常的な世話を行っている。	1,2,3,4,6,7,8,9,10,11,12,13
	施設動物の問題行動への対応	施設動物の排尿・排便行為や暴れる、噛まれるなどの問題行動を経験する、または未然に防ぐためのしつけを日常的に行っている。	2,3,4,8,10,11,12,13
	施設動物の心身の健康管理	施設動物のストレス対策として休息の確保や体重や体調などの健康管理や危険回避のため動物への配慮と、入居者への配慮も行う。	2,3,7,8,11
≪心身の負荷の認識≫	仕事量と時間の増加	施設動物の世話やしつけをすることによって業務量や時間の費やしが増加している。	3,4,8,11
	問題・苦手意識の増加	動物の問題行動への対応を通し、フロア常駐型の動物に対して問題意識や苦手意識を高めている。	8,11
≪動物へのスタッフ間の公私のサポートの認識≫	人員確保や継続の努力	世話やしつけ、訓練に関して訓練士や同僚、上司、ボランティなどフォーマル・インフォーマルスタッフが役割分担を用いながら連携をとるための配慮の必要性を認識し、フォーマル・インフォーマルのスタッフの役割継続が行えるよう円滑なコミュニケーションとシフト管理の必要性について認識している。	全部
	相談・助言体制の構築	訓練士や同僚、上司、ボランティなど、フォーマル・インフォーマルなスタッフが動物介在活動に関するニーズの充足や問題の解決を行うための相談の必要性について認識し、動物介在活動に関する相談や連携関係から、職員のペットに対する相談や配慮を職員間で行っていることを認識している。	2,3,7,8,10
【７．施設動物との絆の意識化サイクル】			
≪施設動物の有用性の認識≫	自己に対する恩恵	施設動物が話し相手、受情を注ぐ対象、癒し、仕事への励まし、運動相手など自己に対する恩恵があることを認識している。	全部
	他のスタッフ、スタッフ間への恩恵	施設動物を介し、他のスタッフへの恩恵を認識したり、他のスタッフとのコミュニケーションの媒介役としての恩恵があることを認識している。	4,5,6,9,10,11
	入居者に対する恩恵	施設動物の求めに応じて、入居者が撫でる、餌やりなど日常的な世話役割の行為を何らかの形で継続し、関心を向けることで主体的な行動化、回想することや会話することで心身機能の活性化、寄り添うことで感情や受情表出、癒され、生きる張り合い、穏やかさ、自立心といった精神機能の安定化などの恩恵があることが認識されている。	全部
≪セラピー動物としての役割統制≫	入居者への見守りの付き添い役	介護職員の夜勤の付き添いや、日中のクライエントへの見守り活動の補助役として意図しながら活用している。	2,4,5,6,8,10,11,12,13
	入居者のリスク管理役	入居者の歩行転倒や車いす移動、クライエントの居室不在や不審者の訪問に対して吠えるなどで介護職員に対して、動物が警戒報告をしていることを認識し活用している。	1,2,8,13
	入居者からの世話役割の補助役	身体機能の向上や精神機能の向上を意図し施設動物を撫でる餌をやるなど日常的な世話役割の行為として一部担えるように促し、施設動物を介在しながら入居者の主体的行動を高め、リハビリテーションや行動化のきっかけづくりに活用している。	1,2,3,5,7,8,9,10,11,12
	コミュニケーションの媒介役	施設動物を介在しながら社会機能の向上や支援者との関係性の構築を意図し、入居者と共通の話題性を確保、コミュニケーションの潤滑油として活用をしている。	4,7,9,11
	家族ケア役	施設動物を家族と入居者との面会時に意図しながら活用し、動物好きの家族の面会の頻度や入居者との外出の頻度が高まり、看取り時には家族にも寄り添っていることを認識している。	2,12
≪動物の存在の在り方の変化≫	擬人化	施設動物を単なる動物ではなく、あたかも自分の同僚や先輩、友人、家族として捉えている。	2,3,4,7,10,13
	当たり前の存在	施設動物との毎日のかかわりを通しながら、施設に動物が日常的ないること、その世話をすることは当たり前の存在、当たり前の行為として認識している。	1,2,7,8,9,10,12

【8．自己成長】			
≪介護専門職としての成長≫	態度やスキルの向上	言語的な訴えが困難な施設動物の欲求の理解や健康管理のために観察する力、くみ取る力、気遣う力を養い、介護力の向上へと繋がる。言語化が困難な施設動物の習性や状況理解のために情報収集、学習し、共存しようとする姿勢から利用者を尊重する姿勢に繋がる。	2,4,5,8,13
	高齢者観の変化	受動的な高齢者像が、施設動物への能動的な入所者のかかわりを体験し、高齢者のイメージや動物共生施設の体験で、高齢者施設に対するイメージが変化している。	1,3,4,5,6,8,9,13
≪新たなる自己像の形成≫	新たな自己形成	動物の問題行動を経験し苦手さ増大させたが、試行錯誤のすえ、乗り越え過程を経験し、新たな自己形成を経験する。	8
	終末期の自己・家族像の形成	動物への恐怖感や無関心がかかわりを経験しながら動物の絆を深めたことが動物から伴侶動物へと変化している3動物好きである自身や家族の終末期のイメージ化が図られ、自身も家族の老後の生活の選択肢に動物入居型の施設を希望している。	1,2,3,4,5,6,7,8,10,13
8カテゴリー	20サブカテゴリー	52概念	

験】を持つ介護職員は，【1．伴侶動物に関する多様な体験と関心】として《伴侶動物の飼育体験と関心》の中で，《伴侶動物への責任と役割意識》を持ち合わせ，《伴侶動物からの恩恵》を認識する者が《ペットロスと乗り越え体験》を経験する中でその重要性をさらに高めている。そのため，【3．動物介在活動や動物介在療法への知識や体験による関心】が高まり，《特別老人ホームでの勤務希望》と《動物介在活動施設の勤務希望》が【4．職場選択の機会と動物介在活動の参加への意識】で高まると，動物常駐型のフロア担当に至っていた。その一方で，動物が苦手で飼育経験を持たぬ者も，《さまざまな高齢者ケア体験》の中で，何らかの形で【4】の機会に恵まれると，高齢者ケアに対する動物の必要性の認識が高まり，やはり《動物介在活動の説明と承諾》を受け担当になっていた。

逆に，飼育経験なく，苦手なものが説明や承認なく担当になると離職やアクシデントによる活動停滞に追い込まれていた。

介護職員の高い期待とは裏腹に，《動物の飼育への責任感》の高さや主観的な《高齢者へのケア体験とケア観》の自信のなさは，【5．日々のケアに対する気持ちのゆらぎ】となっていた。

介護職員が，入居者と動物の【5】として抱いていたネガティブな感情は，日々の《施設動物のケア役割の実行》を通しながら《心身の負荷の認識》として現実のものになっていた。しかし，その負荷は，【6．困難さの乗り越え】として《施設動物へのスタッフ間のサポートの認識》を得ると，自己に対する《施設動物の有用性の認識》により癒され乗り越えていた。一方，入居者に対する《施設動物の有用性の認識》を繰り返すことで，日常生活の中で自然に施設動物に《入居者の支援者としての役割》を与えることができ，それが《自己に対する恩恵》との相互作用を高め動物の《擬人化》となっていた。それと同時に，入居者へのケアと《施設動物へのスタッフ間の公私のサポートの認識》を得ると，施設動物が《当たり前の存在》として変化していた。この相互循環的な関係が動物介在活動を深化させるプロセス【7．施設動物との絆の意識化プロセス】となっていた。

この過程を経験することは介護職員にとって，入所者の《高齢者観の変化》を可能とし，《施設動物のケア役割の実行》の継続が，介護専門職としての《スキルの向上》，いわゆる《介護専門職としての成長》に繋がっていた。そして，困難の乗り越え過程の中から《新たな自己形成》や，これらを可能とする施設の取り組みから《終末期の自己・家族像》といった《新たな自己像の形成》，【8．自己成長】を可能としていたのである。

（1）「動物介在活動参加導入期」のストーリーラインと結果図（図2）

ここでは，動物介在活動参加継続期に影響を与える前提条件と必要条件が含まれていた。介護職員の意識変容とその要因には，介護職員の動物の飼育経験の有無や好き・嫌いといった【1．伴侶動物に関する多様な体験と関心】と，ベテランか否かといった【2．高齢者ケアに関する多様なケア観と体験】，【3．動物介在活動や動物介在療法への知識や体験による関心】の有無，介護職員と運営主体の【4．職場選択の機会と動物介在活動の参加への意思】【5．日々のケアに対する気持ちのゆらぎ】の5カテゴリーと12サブカテゴリー，31概念で構成されていた。

介護職員が動物介在活動を開始する過程には，上記【1】【2】【3】が前提条件に含まれていたが，介護職員が，動物介在活動を継続す

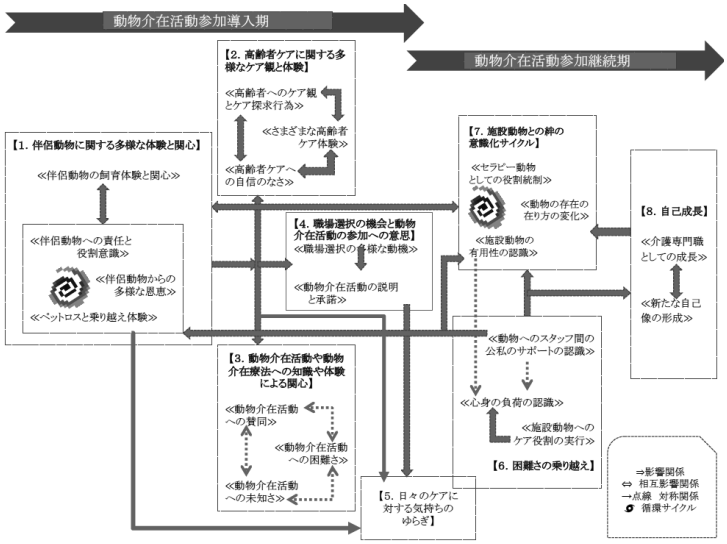

図１　全体の結果図

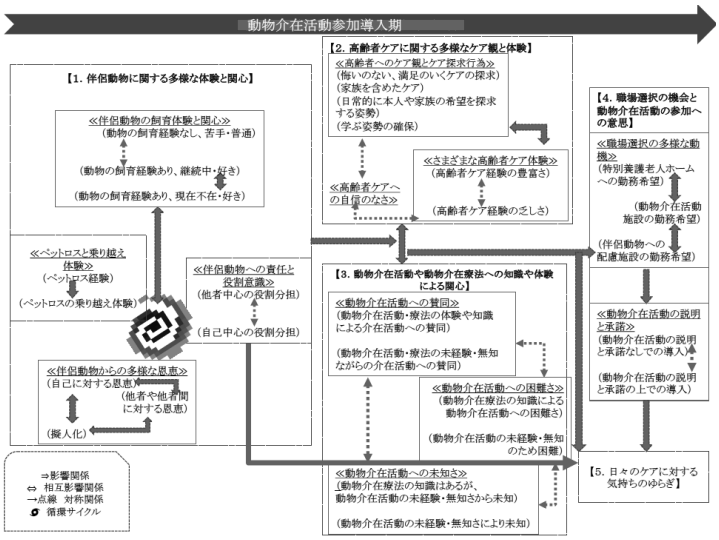

図２「動物介在活動参加導入期」の結果図

る過程では，【1】～【3】の有無にかかわらず，介護職員による【4】が運営主体者側から提供されることが必須条件となっていた。しかしながら，【4】を承諾する過程で多かれ少なかれ【5】の感情が生じていた。

以下，カテゴリーごと順次に結果と考察を述べていく。

（2）「動物介在活動参加導入期」のカテゴリーごとの結果と考察

①介護職員のもつ動物介在活動の前提条件

動物常駐型のフロアの担当になる介護職員は，以前から《伴侶動物の飼育体験と関心》を持ち合わせ，《伴侶動物の飼育経験あり，継続的，好き》《子どもの時から飼育経験あり，現在不在，好き》というグループだけでなく，意外にも，（伴侶動物の飼育経験なし，苦手，普通）という対極なグループで構成されていた。本調査対象はやはり，飼育経験を持つ者が８割と，３割５分の結果を示す全国調査より飼育率

は高い結果ではあった[10)]。

この飼育経験を持つ者は，自身のCAの飼育に対し《他者中心の分担役割》か《自己中心の分担役割》に分類された。中には，高すぎる《自己中心の分担役割》から，飼育をあきらめる者もおり，さまざまな《伴侶動物への責任と役割意識》があった。

この他者中心，自己中心の役割意識の日々の積み重ねは，個人にとって「いろいろやってもらっています。結構吠えるから番犬…私が飼おうと思って。犬バカですね。…手がかかります。散歩大変ですよ。かわいいんですが，結構気ままのところがありまして…（11）」と《自己に対する恩恵》と「家族との間で動物の動画を通してキャッキャしたり，母親と一緒に寝ている姿を見ると何やっているんだと思いながらも安心できたり（10）」と《他者や他者間に対する恩恵》の相互影響関係を経験しており，やがて精神的な結びつきとして「ペットの存在は家族ですね。友人よりは家族ですね。常に子供の頃から居ますので家族という感じですかね（7）」と，介在活動参加以前から動物の存在を当たり前の家族と《伴侶動物の擬人化》の傾向がみられていた。

この役割意識と恩恵は，《ペットロスの経験》をすると高まっていた。儀式や気晴らし，周囲の気遣い，代替ペットを活用しながらの《ペットロスと乗り越え体験》により顕著に認識されるからであった。時にペットロスのような人生の危機的な体験をしたものは，喪失対象との関係づけの過程から経験を意味づけ，自らの生きる意味を模索する[11)]。本研究対象も同様の内容が多く聞かれていた。そのため，役割意識と恩恵，ペットロスの３者を循環的影響関係としていた。

この３者関係が直接影響を及ぼすのは，【３．動物介在活動や動物介在療法への知識や体験による関心】であった。「動物が好きで，最初はドックトレーナーになりたいと持って大学で勉強しました。…老人ホーム行ったり，施設にいったりしているうちに，福祉の方に興味が出てきて。介護職になったという感じです（11）」「…セラピードッグはテレビでもやっているので，動物と触れたりして笑顔になっていたりする映像とかみて，癒されているのだろうなと思っていて賛成でした（９）」と経験や教育，テレビ映像を活用しながら直接・間接的に動物が他者に与える恩恵を理解し，《動物介在活動・療法の体験や知識所持の介在活動への賛同》をしていたのであった。その一方で，「わたし（動物セラピー），そういう勉強したくて大学行っていたのでいいことかと思いますが…全員が動物好きではないので…適性を見極めて，ストレスがないようにできればいいと思います…玄関付近は出入りが激しいところなので，以前から変わらなく反対です（４）」と知識を持つことで《動物介在療法の知識所持の動物介在活動への困難さ》となったケースもあった。対極的に《動物介在療法の知識所持の，動物介在活動の未経験・無知さの未知》を示す者もいた。

《動物介在活動の未経験・無知さの未知》を示す者もいるが，動物好きであれば《動物介在活動・療法の未経験・無知さの介在活動への賛同》を示していた。一方，本研究の調査対象者は飼育経験がない者もいるが，これらは「以前は賛成も反対もなく思いつかなかった。（以前勤めた施設の入口に動物がいた）システムが理解できたから賛成です…普通だと思っています（１）」と，間接的な経験をすると，システムの理解ができ賛同に変わる手続きを経験していた。

本調査対象の介護職員は，入職前から既に動物介在活動・療法の概念を理解していた者は全体の３割と，病院看護師調査の65.4％と比較しても介護職員のその認知度は低い[12)]。福祉系大学卒業者だけがその適切な知識を保持しており，他は，関心を示した者だけがマスメディアを介しながら理解していただけであった。看護職員と異なり，介護職員の資格取得過程によっては動物介在活動を学ぶ機会がないまま現場に従事している者が少なくないことが理解された。しかし，これは動物介在活動が発展しない要因にもなり，他職種と連携する場合，時に介在活動に対する共通認識に欠けることも推測される。そのため，介護職員に対する活動の認知度を高めることが必要とされる。

次に，動物常駐型施設のフロア担当になる前に，介護職員は《高齢者ケア経験の豊富さ》の中で《高齢者へのケア観とケア探求行為》を持っていた。その一方で，在宅・施設と様々な支援形態を持つ高齢者支援の場合，特別養護老人ホームでの勤務形態が初めてになると，職員はケア経験を持っていても学卒者と同様に《高齢者ケア経験の乏しさ》を示しており，それが《高齢者ケアの自信のなさ》として語られていた。

②動物介在活動参加導入への必須条件

こうした動物や介護について多様な意識・認識・体験を持つ介護職員が動物常駐型施設でフロア担当になるためには，【4】の機会を得なくてはならない。

《職場選択の多様な動機》では，職員は，入職前から《動物介在活動施設の勤務を希望》しているわけではなかった。 大学教育の中で，動物介在活動や療法の知識を身につけた者以外は，その経験や知識がなくても《特別養護老人ホームへの勤務を希望》する者が「…学校に求人が来た時に気になって申し込みをしました（6）」「私自身，特養で働きたいと，…ちょうどできるということで…わんこもいるとのことで（10）」と，動物好きの者が施設との出会いの機会を得ると，最終的な職場選択として《動物介在活動施設の勤務を希望》し採用となることの方が多かった。本調査では全体の６割が入職前から取り組みは知っており，面接時に配属希望を示していた。また，動物常駐型の施設は，職員のペットへの理解も深く，１名は「うちの（犬）を看取りたく…自宅に近い場所で，動物（ペットの飼育）の理解がある職場と聞いて来た（8）」ことが入職の理由となっていた。介護人材が確保しにくい現状の中，動物介在活動に対する取り組みは，新たな人材確保のきっかけづくりにもなりうることになる。

特養希望者は入職面接時に初めて《動物介在活動の説明と承諾の上での導入》がなされる場合もあったが，逆に《動物介在活動の説明と承諾なしでの導入》では，「…自分は苦手だったので迂回しながらがんばったのですが…犬のいない特養を希望し，そこだけは勤務前からお願いしちゃった（12）」「苦手な職員もいて，…ちょっとかんじゃったりしたのがあって，他のところで犬を飼ってもらえる人が出てきたので渡しました（1）」と，不快の継続やアクシデントの対応で，動物介在活動の停滞と離職の原因ともなっていた。そのため，活動を継続・発展するためには，説明と承認を，入居者や家族だけでなくスタッフ全般に実施する必要がある。

【5．日々のケアに対する気持ちのゆらぎ】では，介護職員は動物常駐型施設のフロア担当として大きな《活動参加への希望・憧れ》を示す一方で，「自分がそこまで仕事としてできるかどうかというと，まだまだ，やることでいっぱいだったから…犬を見ながら入居者様をできるかというと…（10）」，「従来型の古いやり方でやってきたので，こういったユニットケア，ましてやこういった動物のいる空間が初めてだったので，大変かなと思った（2）」と，経験の有無にかかわらず配属異動の前後には《活動参加への躊躇・不安》の両価的な感情を経験していた。特に，豊富な介護経験者であっても，特養への《職業経験の自信のなさ》があると，新たな取り組みによるケアの見通しの悪さ，イメージの持ちにくさ，そこに性格特性に《自己中心の役割分担》の高さがあると大きく揺らぎが存在していた。

また，動物常駐型に取り組む施設は，国内では少数であるため，多くの職員はたとえ動物介在活動・療法の経験や知識は持っても，実際体験すると《活動参加への驚き》を受けていた。

これらの揺らぎはストレスに影響する個人要因となる[13]。フロア担当の介護職員の中には入職前後からすでに心的負担を生じさせている者もおり，何らかの対処が必要と考えられた。

（3）「動物介在活動担当継続期」のストーリーラインと結果図（図3）

動物介在活動における介護職員の意識変容のプロセスは，決して一方向でも一直線でもなく，また不可逆的なものでもない。揺らぎ戸惑う中での形成という現象特性が見出された。

介護職員が動物介在活動を継続しながら

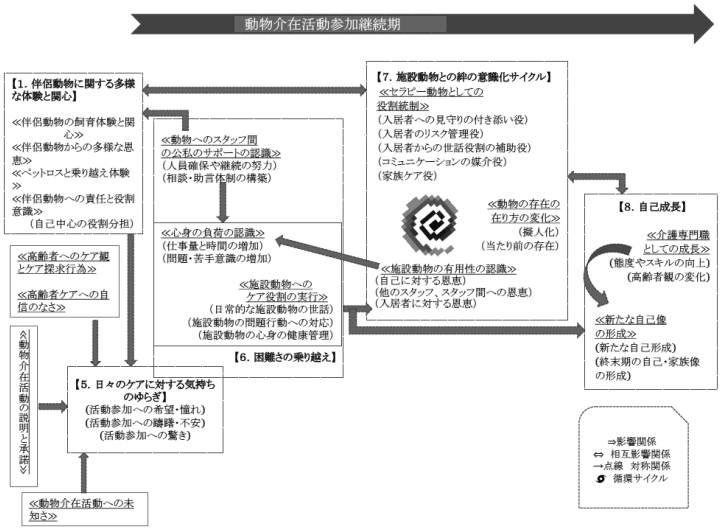

図３「動物介在活動担当継続期」の結果図

【7．施設動物との絆の意識化プロセス】を経験し，専門職として，人として最終的な【8．自己成長】まで意識変容を可能としていたが，それには【6．困難さの乗り越え】過程の経験が循環作用を高めていた。ここでは３概念，８サブカテゴリ―，21概念が抽出された。

以下，各カテゴリーの結果と考察を順次述べていく。

④【6．困難さの乗り越え】過程の実現

この乗り越え過程には，《動物へのスタッフ間の公私のサポートの認識》と，自己に対する《施設動物の有用性の認識》の２つのポイントが必要であった。

フロア担当の開始前後に介護職員は，【5】の感情を経験していたが，これは入居者と《施設動物へのケア役割の実行》の両立により《心身の負荷の認識》として現実になっていた。

排せつ処理，餌・水やり，遊び相手，片付け，声掛け，通院移動，犬の散歩と《日常的な施設動物の世話》は，伴侶動物の飼育と同じく手間を感じていた。これに加え，動物介在活動では，職員は，「犬に対してオンオフを付けているんですよね。…私たちにも休みがあるように，彼らの時間も必要ということで，…一日４回は休息，夜はゲージの中で寝る（２）」「体調管理だけは徹底していますね…定期的な診察も…老猫が多いので病気の子もいるんですよ…毎日の薬や通院している子もいます（５）」「入居者さまが餌をあげないか…おやつを落とさないか…それを食べないように私たちが見守っています（７）」と，施設動物特有に生じるストレス負荷の低減，入居者の見守と体重・体調管理，施設動物の高齢化への対応など《施設動物の心身の健康管理》が不可欠な要素となっていた。また，《施設動物の問題行動への対応》も必要になり，「番犬問題が本当に嫌で，…すごい吠えるんですよ，入居者さんも『うるせい』と怒鳴るし，それを放置するのがすごく嫌で，それで『いけない』っていうルールになっているのですが，いけないというの嫌じゃないですか。一日に何回もいけないっていうの。それがストレスになっていて（11）」と吠えとしつけ行為の継続が入居者への居心地の良い環境を追及する介護職員にとっての心的負荷を高める原因となっていた。中には「一匹のワンちゃんに噛みつかれたことがあり，それからそのワンちゃんに対しては怖くなった…ドキドキしちゃった…仕事をするときにはそれを乗り越えなくちゃいけないと思うのですが，体が否定できず…そばを通る時に大回りをしたり…（８）」，「犬のいるフロアだったんですが，自分は犬が苦手なので迂回しながらがんばった（12）」「ちょ

っと職員をかんじゃったりしたのがあって，それって私たちの接し方が悪かった…こちらの方がかまいすぎちゃって，そうすると犬はちょっとそれが嫌だったりするじゃないですか，それが何って（飼育困難）感じになっちゃって（1）」とアクシデントの対応過程で問題意識を高める者もいた。この物理的な《仕事量と時間の増加》，動物に対する《問題・苦手意識の増加》が更に《施設動物へのケア役割の実行》を負って《心身の負荷の認識》となっていた。これはベテランか否かに関係なく起きる問題であるため，動物介在活動を進める上で，この《心身の負荷の認識》をできるだけ早期に解決する必要があった。そのため，介護職員は，《動物へのスタッフ間の公私のサポートの認識》と《施設動物の有用性の認識》を活用していた。

介護職員が《施設動物へのスタッフ間の公私のサポートの認識》をしていく段階には，まず，施設職員内外の《人員確保や継続の努力》をしていた。「散歩はボランティア…たまに夜勤明けの職員…しつけはユニットのリーダーが中心…お風呂はボランティアさん…カットも…通院も…1人のユニット長が（11）」とフォーマル・インフォーマルの支援者の体制作りをするため「…近所の人が来てくれて，…口コミで来てくれたのでそれが大きいです（10）」と，介護保険制度上の人員配置基準規定の限界に対応するための支援体制を駆使していた。

しかし，これは業務負荷を低減させる一方で，「難しいことがあります。手が離せないときに話をしなくてはならない時もあります。ボランティアさんなので，仕事ではないので。相手の気持ち，思いが人それぞれ違うときに，話をしなくてはならないというのがあるのですが。仕事を離してまで行くタイミングというのが難しかったりするので（10）」と新たな労働負荷の問題も発生させていた。いずれも，この相互支援システムを構築していくためにはフォーマル・インフォーマル問わずコミュニケーションを介し，共通の目的や対応のもと柔軟的に対応することが必要となり，これが新たな労働負荷と捉えられていたのである。その一方で介護職員は，「閉鎖的な感じがちょっと広がった感じかな…いろいろな職種の人が入ってくる環境であって，…入居者さんの生活を，閉じ込めている感が少ないというか，外から刺激がはいってきて（11）」と動物を介しながらの施設内外との連携が，スタッフだけでなく入居者に与える副次的恩恵も感じていたのであった。

支援体制の構築は，他にも集団だけでなく個別の《相談，助言体制の構築》をしていた。犬に噛まれた職員，排せつをされた職員は，同僚との問題の共有化で前向きな対応に変化していた。同僚はCAの良き理解者であるため，同僚のCAの看取りや病気に対する気遣い，グリーフケアまで行っていた。

介護職員のバーンアウト研究では，職場内でスタッフの抱く困難の要因には，職場のサポート，スタッフ同士の葛藤，業務負担感が挙げられており，動物介在行動の取り組みは，副次的に職員のバーンアウトの低減にも繋がると考えられる[14]。

次に，困難さを乗り越えるには，《施設動物の有用性の認識》が必要になっていた。すべての職員は，動物への日々の世話や，入所者や他者が動物と触れ合うことで生じる何らかの恩恵を認識していた。

《自己に対する恩恵》では，「自分の話し相手，愛情を注ぐ相手，癒しの相手，触ることによってストレス，落ち着く，もう一度考えようと，カット来たとき，落ち込んだ時に…名前読んじゃったりして癒しに…かまってしまったり（3）」「仕事自体は体力勝負なのでいろいろ忙しくて疲れちゃったときに，犬にちょっとだけ触るだけでも癒されるとか，疲れが吹き飛ぶとか。犬の顔を見ただけでしっぽを振ってくれたりするので，大変な勤務でも頑張ろうと思える，居るだけで癒される。最初は，覚えることも多く…大変だったんですが，わんちゃんがいるだけで頑張れる，癒されるから。心の糧。前向きにさせられる（6）」「だんだんかわいくなってくる…自分のストレスということもあるし，番犬になっていますよね。番犬は求めていないんですがね（11）」と，動物とかかわることで得る心身の負荷と対称的に，癒しの対象として認識することで乗り越えていた。

このように，介護職員にとって施設動物から受ける癒しにおいても，精神的サポートとして，職員のバーンアウトや離職を低減するための対処法に繋がっていくと考えられた。また，本調査対象者の中には，施設動物との精神的な絆がCAを亡くした職員にとってグリーフケアになっていたことも語られていた。《他のスタッフ間における恩恵の認識》でも，「他のユニットの入居者さんやご家族やショートのご利用者が，遊びに来てくれたり，犬のために洋服を作って…散歩など，ほかのユニットの人たちの気分転換に…，仕事終わりに見に行ったり，遊びに行った…癒されて帰ってくる…みんなしっぽをふって玄関まで…お出向いがかわいくて…そこから皆笑顔になって（6）」と，フロアを超え，施設の壁を越えて施設動物を中心にスタッフ間の連携を可能とする相互作用を育むことも可能としていたのである。

②施設動物との絆の意識化の過程

心身の負荷に対する対策や動物のさまざまな恩恵が認識されると次の【7】のステップに移行する。

まず，入居者と自分と施設動物の３者関係の絆の意識化の過程では，動物介在活動の本来の目的に《入居者に対する恩恵》がある。介護職員の語りからは，「…その空間にいるってだけで安心していられる…家と変わらない状態で過ごせる（4）」「…猫が撫でてってくっついて…入居者さん撫でています（9）」「…犬も分かっているので…（2）」と，「猫をきっかけに動いてくれたり…（4）」，「…猫がいると手を振ってくれたりするのはうれしくなっちゃう（1）」「認知症のある方…代わりに来た猫に会うと，大体のところはその猫のことになる…私一人ではかなわない（5）」「…僕らにできないことができるということです。本当にすごいと思います（7）」「…いくら吠えるのをやめなさいといってもきかないワンちゃんでも入居者さんの心を癒されているし（8）」「…何か自分の役割を持ってやっていることなので，入居者さまにも良いこと（9）」「笑顔を作る，癒しもあるし，リハビリテーションにもある，きっかけ，話のネタなどもそうですね。かわいいねというのは言っちゃうじゃないですか，疲れたのとか自然にしゃべって，気遣っている。話しかけてやり取りしているのがあり。当たり前に住んで気遣ってあげている一般の家族である（10）」など，「心理的効果」「身体的・生理的効果」「社会的効果」と先行研究のCAの効果とほぼ同様のものがあった[15]。

これによりフロア常駐型の動物介在活動では，施設内においては家庭や家族の雰囲気を提供できることが示された。

介護者から「入居者も犬とよく話しています。どうしても職員は入居者さんと，つきっきりの対応は無理なので（13）」「…穏やかっていうか。あんまりイライラしていないというか。依存心が低いんですよね。…穏やかですよね。というか静かというか（3）」と，施設動物が入居者の自立性を高める結果，ケア負担の低減になっていたことも示されたのである。

こういった毎日の授受関係の相互作用から，介護職員は，施設動物を先輩，同僚，仲間として，より心理的距離を近づける者は，家族や友人と捉えていた。この《擬人化》は「何も違和感なく，もう家族と暮らすように当たり前のことで，自然かなと…（7）」「初めは不安でしたが，大変なこともあるんですよ，…それが変わったのは，動物に助けられたからだと思うんですよね。…当たり前，施設にいるのが当たり前，いないと寂しく思う。…家族ですかね，…いるのが当たり前の存在なので，大好きなものに囲まれて仕事をするのって。怒ってばかりいますが，うれしいと思います（10）」と《当たり前の存在》として施設動物の認識を高めてもいた。

動物が苦手だった職員は，施設動物の看取り悲嘆の経験から，CAの喪失と同様その存在の意義の認識を経験することとなり，施設動物を当たり前と捉える職員には，動物喪失によるグリーフケアの必要性も，今後示唆さる結果であった。

CAの飼育からの恩恵と異なり，動物介在活動の場合，介護職員は，《入居者に対する恩恵》と動物との絆を活用するため《入居者からの世話役割の補助》に徹することが語られていた。

「夜勤のとき…着いて来てくれて…待ってて…夜勤一緒にやりましたと申し送りに書いた（8）」「車椅子で一人で歩いている入居者さんに向かって…犬が吠え…私たちが気づく…立ち上がっている時も…よく教えてくれたわねっていう感じで…（2）」「10人いて，ずっとその10人に一緒にいれるわけではないので…自分のサポーターになってくれる。…猫ちゃん好きの人のところには猫ちゃんを…見えるところに移動したりしています（12）」と日勤や夜勤の付き添いや見守り役，リハビリ療法士としても「手の拘縮がある方で…犬たちにおやつを，職員も介助しながらあげるようにして，犬が来るもんだから，否応なし広がっちゃう…自然とグーパーができ…お箸上手に使えるんですよ。…こらこら，だめよと言ったりすることで，声を出し…OTとこれを生活リハビリとして…継続している（2）」と犬の習性と入居者の役割意識の活用を意識的に使っていた。「…筋金入りの歯医者嫌いの入居者さんが…ぷーにゃん（犬の名）が来てくれるんで…あの子は心配してくれているんだねって…そこに乗っかっています。気が強い一面とは別の面がみられる。入居者さんのこういうところもあるというのが理解できたりしています（11）」と動物との絆を意識させ入居者の異なる一面を引き出していた。「一緒に同居（犬と）している方…動物病院に一緒に行きたいということで…どんな病院に行っているのか…行って…安堵の表情をされ…先生に挨拶をしなくちゃということでそれもできて，本当に行ってよかったと（2）」「猫と一緒に来た方は，ご自分で…できる範囲でやってもらっています。…できないことの補助をします（1）」とペットとの間で培われた２者関係を，断ち切らない配慮が継続的にできることが家庭内でのCA飼育とは，異なる点であった。

⑥【8．自己成長】

最終的に，介護職員は活動を継続する中で，【8】に向かって歩んでいた。その方向性は必ずしも同一ではなく，個々人によって異なりをみせ，それは《介護専門職としての成長》と《新たな自己像の形成》の２つのカテゴリーで構成された。

《介護専門職としての成長》は，《施設動物のケア役割の実行》への【6．困難さの乗り越え】の過程で【8】が図られていることで明らかになった。介護職員は，《ストレスや体調管理》を通しながら，専門職としての《態度やスキルの向上》に繋がったり，【7】によって《高齢者観の変化》に繋がっていた。

具体的には，《介護専門職としての成長》の過程では，介護職員は，「入居者様の見守りは動物の見守りと同様だと思います。体調面や変化なんかに気づくことは猫も一緒かと思います。…衛生面についても同じです。清潔にしたり…（5）」，「…なので早めの段階で病気に気が付いて病院に連れて行ってあげる…（2）」としていた。言語を持たぬ動物を理解するために，観察力やくみ取る力が人間のそれより必要となり，早期介入，早期治療の視点を形成することにも役立っていた。また，動物の世界を理解しようとする過程で，情報収集をし，学習し，共存しようとする姿勢を促すことになっていた。これらの変化を，フロア主任が意識的に職員に促すことで介護人材に必要なスキルの強化に活用していた。つまり，動物の世話は人材育成のための一つのツール，介護職としての資質の向上に繋がっていたのである。

次に，《高齢者観の変化》では，一つ目は，動物とかかわる入居者を通して地域での日常生活を垣間見ることができ，その人らしさの探求が可能となっていた。２つ目が高齢者施設観に変化が見られ，どの職員も，動物常駐型施設を今後の高齢者施設の在り方の選択肢の１つに加え，普及をさせていくことを望んでいた。

《新たな自己像の形成》では，動物の問題行動を経験した介護職員は，動物に対して苦手意識を持つことになったが，《動物へのスタッフ間の公私のサポート認識》から試行錯誤を続け【6】の体験を乗り越える過程で，他者理解を深めることや，あきらめない自分，挑戦し続けることの重要性を学び，《新たな自己形成》を可能とした。更に，かつて動物が苦手な職員でも，自分・動物・入居者の深化のサイクルから動物に対する嗜好の変化となり同様に《新たな自己形成》を可能としていた。

次に，現にCAを持つ，持たないにかかわらず介護職員は【7】【8】の循環サイクルから，人生における動物との絆も深めていた。《終末期の自己・家族像》として，動物常駐型の施設への入居を自身や家族の将来像と照らし合わせ選択していたのである。動物介在活動は職業に対する誇りを高め，人生に対する満足度を高めるきっかけづくりになることが可能性として示されたのである。

5．総論：人と動物との共生社会の実現に向けた取り組みへの提言

本研究では，M－GTAを用いて人と動物との共生社会の実現に向けた方法について検討することを目的にした。この共生していく環境を構築するための実践は，前例はなく実現に必要とされるノウハウの蓄積がないため，その過程が意識化・概念化されることなく埋没していることが考えられる。本研究において生成したオリジナルな概念は，見過ごされがちであった実践を概念としてとらえ直したものであり，その概念を用いることによって，人と動物の共生社会を実現するための取り組みにおける新たな視点や理解，解釈の道筋をもたらすことができる。

以下にこの研究から得られた人と動物の共生社会の実現に向けた取り組みへの示唆を記す。

① 介護職員の能動的な動物介在活動のためのプロセスで捉える視座

介護職員が，動物介在活動を継続しながら意識変容していく過程にはいくつかの段階があった。「動物介在活動参加導入期」と動物介在活動参加継続期」の２つである。

特別養護老人ホームで人と動物との共生社会の実現に向けた取り組みを具体的に促進するには，施設側はただ漫然と導入していくのではなく，段階ごとに区分した介護職員の変容への理解と，そこで求められる支援を意識しながら関わっていく「介護職員の能動的な動物介在活動のためのプロセスで捉える視座」が必要となる。

導入期には，動物介在活動は，動物好きで飼育経験があるからといって，即に入職し，フロア担当になる分けではない。介護職員は，飼育経験や動物好きの有無にかかわらず，動物介在活動や療法に取り組む施設を経験したり，動物好きや飼育経験を持つ介護職員が学校教育やテレビの放映などの経験を得て効果を知り，転職や就職時に（動物介在活動施設の勤務を希望），もしくは，（特別養護老人ホームへの勤務を希望）から，取り組みを知り活動に賛同ことになった。

介護職員は（動物介在活動・療法の未経験・無知による困難さ）を示す者だけでなく，知識を持っても困難さを示す者もいたが，《配属の説明や承諾》を施設側より受けると賛同を示し，逆に，説明や承諾を抜かすと，アクシデントが起きた際の離職や活動停滞に繋がっていた。

今後活動を活発にするにはこの段階で，２つのアプローチが必要である。１つ目が高齢者福祉に関心を持つ以前から学校教育時や就労時に動物常駐型施設に対する知識や体験を増やすことである。介護職員の資格取得過程が多様であるため，教育現場だけでなく臨床現場サイドとの連携は欠かせない。普及啓発のため，実践研究の発表や見学会やマスコミの報道への協力，市民向けのイベント参加やリーフレットの活用など用いて認知度を高めることが必要となる。

２つ目が，施設動物の取り扱いガイドラインを作成し，就職面時に活動内容についてきちんと説明し，対応への理解を深めると同時に，介護職員の動物に対する飼育経験を量と質，嗜好を踏まえて把握した上で承諾を得ていくことが必要である。

次に，導入初期には，例え介護職員から承諾と賛同が得られても，憧れや希望を抱く半面，ほとんどの者が衝撃，躊躇や不安といった両価的感情を経験していた。この背景には，（高齢者ケアの経験）の自信のなさや，動物の世話に対する（自己責任）の高さがあるが，新人か否かにかかわらず，ゆらぎは生じることと，上記のタイプの者には初期の時点から心理的側面への配慮を含めかかわることが必要である。

次に継続期である。ここでは，入所者と《施設動物のケア役割の実行》を同時に行うことで

《心身の負荷の認識》として，気持ちのゆれが現実となる段階である。しかし，《施設動物へのスタッフ間の公私のサポートの認識》や自己に対する《施設動物の有用性の認識》を高めることが，この揺らぎや心身の負荷といった【困難さの乗り越え】る原動力となっていた。

そのため，運営主体においては，介護職員の日常的な世話や管理，訓練，問題行動に対する時間や労力の負荷を低減できるようにフロア内人員配置を増員できるシステム作りが必要である。このため，社会福祉協議会や動物愛護推進委員会，近隣の地域住民に取り組みを理解し，活動賛同者を増やすような声掛けをするなど運営主体からの努力が必要となる。犬猫の訓練だけでなく，フォーマル・インフォーマルすべての人員がセラピストとして動物を育成できる知識や態度を身に着けるよう，目標設定をし，動物訓練士を活用しながらの定期的な教育機会を作ることや，スタッフ間の横の連携の確保ができるような個別相談やカウンセリングの体制を作ること，施設動物の死別前後には入居者だけでなくスタッフのグリーフケアが十分に行えるシステムも必要と考えられる。

その結果により，活動が成熟され，【施設動物との絆の意識化サイクル】を繰り返すことが，最終的に《介護職としての成長》《新たな自己像の形成》といった介護職員の【自己成長】を促すことができるのである。

６．本研究の限界と今後の研究課題

本研究では，調査方法に質的研究方法，とりわけＭ－ＧＴＡを使った。方法論的限定には，分析に用いるデータの範囲が含まれ調査対象者の限定をおこなった。その結果，現に動物介在活動中の者に偏重した結果が導き出された可能性がある。２つには，年齢層や男女比も偏りが生じある一定のバイアスをもたらした可能性も否定できない。３つには，活動参加以前や活動途中にドロップアウトした職員に関しては言及できていない。より厚く，正確な結果を得ていくために今後の研究課題として留意したい。

【注】

1）工亜紀，「コンパニオンアニマル論」『畜産の研究』Vol.54（1）p169−170　2000.

2）桜井冨士朗，朝田則子「ヒューマン・アニマル・ボンド（人と動物の絆）と人の健康に果たすペットの役割」『産業ストレス研究』vol.5　53−61　1998.

3）安藤孝敏「高齢者とぺっと動物」「老年社会科学」第23巻第１号　25−30　2001.

4）松田（2005）の国内外のCAに関する文献研究を行った調査では，高齢者への効果として，生活リズムの獲得，他との繋がり，情動的関係，精神症状の改善，生理的機能の安定，周囲の人との相互作用の促進などを挙げている．松田光恵，「人とコンパニオン・アニマルに関する文献レビュー―犬との関係を視野にいれて―」『成城コミュニケーション学研究』Vol.6　p61−87　2005.

5）安藤孝敏「高齢者とぺっと動物」「老年社会科学」第23巻第１号　25−30　2001.

6）桜井（2000）は，国外の研究動向を検討した結果，高齢者の場合，生活満足度，抑うつ状態，孤独感といった「心理的効果」が最も多く，次に生存率や通院回数，薬の服用といった「身体的・生理的効果」，社会関係，社会的活動，日常会といった「社会的効果」の順に多いとのことだ．桜井富士朗「ヒューマン・アニマル・ボンド（HAB）研究の動向」『産業ストレス研究』vol.7　187−190　2000.

7）横山（2000）は，生理的機能（病気の回復・適応，病気との闘い，血圧やコレステロールの低下，リハビリ），心理的機能（元気づけ，動機の増加，活動性，感覚刺激，リラックス，くつろぎ作用，肯定的感情，心理的自立，ユーモア，遊びを提供，親密な感情，無条件の受容，感情表出，カタルシス作用，注意持続時間の延長，反応までの時間の短縮，回想作用），社会的機能（社会的相互作用，人間関係を結ぶ，言語活性作用，集団のまとまり，協力関係，身体的・経済的な独立，スタッフへの協力を促す効果が上げている．横山章光「アニマル・セラピー」『畜産の研究』第54巻　第１号　191−196　2000.

8）小杉正太郎，「ペットロスに関する心理学的検討」『Animal Nursing』vol.7（2）p8−13　2002.

9）M-GTAは，データに根差した分析を行い，理論を生成する研究方法であり，人間と人間が直接やり取りをする社会的相互作用に関わる事

柄のプロセスを体系的にとらえる研究に向いているとされる．また，M-GTAは「分析テーマ」と「分析焦点者」の２点から解釈を行い，限定された範囲内における説明力にすぐれた「理論の生成」を目的としている．木下康仁 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践― 質的研究への誘い―』弘文堂．89－91　2003，木下康仁『ライブ講義M-GTA実践的質的研究法―修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて―』弘文堂，66－68　2007.

10）内閣府の1974-2010年までの比較調査の結果，ペットの飼育経験者は年々減少し2010年は34.3％であった．内閣府大臣官房政府広報室HP「動物愛護に関する世論調査」2010年度.

11）窪寺（1997）は，「入生の危機に直面して生きるよりどころが揺れ動き，あるいは見失われてしまったとき，その危機状況で生きる力や希望を見つけだそうとして，自分の外の大きなものに新たな拠り所を求める機能のことであり，また，危機の中で失われた生きる意味や目的を自己の内面に新たに見いだそうとする機能のことである」としている．窪寺俊之『スピリチュアルケアとQOL』緩和医療学，三輪書店　3　1997.

12）熊坂隆行，升秀夫，片岡三佳「病院に勤務する看護職員の動物介在に関する意識調査：動物介在を導入予定である精神科病院に焦点をあてて」日本農村医学会雑誌　57（1），34-49，2008.

13）中野（2005）は，ストレス耐性に弱い性格傾向に，几帳面，完璧主義，要求首位純が高い，神経質，責任感が強い，仕事一筋，過剰適応，取り越し苦労をしやすい，周囲の目を気にする，甘えるのが下手，コーピングの偏りを挙げている．中野敬子『ストレスマネジメント入門―自己診断と対処法を学ぶ』金剛出版　2005

14）伊藤まゆみ，金子多喜子，大場良子，藤塚未奈子「終末期ケアに携わる看護師のストレスに起因したポジティブな変化がバーンアウトに及ぼす影響」共立女子大学看護学雑誌　3，1-10，2016.

15）濱野（2002）は，犬の飼い主を対象に愛着尺度を作成し，①日常生活における犬との快適な交流，②情緒的サポート役割，③社会的相互作用促進の役割，④家庭内ボンド役割，⑥養護性促進役割の６つの因子がCAが家庭内において情緒的役割を提供していることを報告している．濱野佐代子「人とコンパニオンアニマル（犬）の愛着尺度―愛着尺度作成と尺度得点による愛着差異の検討」白百合女子大学発達臨床センター紀要（６），26-35，2002.